

浄

monthly
JODO
1997・2

土



1997
2
February

日本を楽しくする電話

浄土

1997/2月号 目次



カラータラビア名刹を訪ねる	写真=小堀祐二	3
法然上人と私	坂野泰巨	8
表紙は語る	岡 克巳	15
名刹を訪ねる九品佛浄真寺	真山 剛	16
日常仏教語		23
連載小説「法然上人をめぐる人々」	石丸晶子	24
御法語に聴く		32
若和尚のチョットいいはなし		37
読者からの仏教相談		38
続 午後の日差しの中で	吉川英明	42
掌篇随想		49
うまい野菜と料理の話	我田 大	50
吟行を楽しむ	大畑 等	58
Jフォーラム		63
事務局便り		69
編集後記		70

表紙題字=浄土門主 中村康隆猥下
表紙撮影=岡 克巳
アートディレクション=近藤十四郎

二十六日には讃岐国の塩飽島しあくじまの地頭である、駿河権守高階保遠入道西忍さいにんの館やかたへお着きになった。西忍は「薬湯をもうけ、美膳をととのえ、さまざまにもてなしたてまつる」とある。この薬湯こそが、法然上人の旅のお疲れを癒すために用意された薬風呂のことであろう。そのうえご馳走をそろえてご接待したのである。

法然上人はたいへん喜ばれ、西忍の館で歌を詠まれている。

極樂もかくやあるらんあらたのし

とくまいらばや 南無阿弥陀仏

このような接待をうけられるとは、まったく思ってもみなかったことである。阿弥陀仏の極樂もおそらくこのようにたのしいところでありましょう。お念仏して早く阿弥陀仏のおられる極樂浄土に生まれたいものだという意味である。

法然上人は念仏往生の道を説かれ、島民たちにも念仏をおすすめたのであった。西忍は熱心な念仏信者となり、この館を寺としたのが、今の専称寺である。

私は、法然上人が生涯ではじめて、ほんのひとときではあるが「ごくらく、ごくらく」といえる気分で入浴されたことがあったことを知り、安堵したことである。

○

法然上人の人物像であるが、まず御影（肖像画）によって想像することができる。肖像画は二尊院、知恩院、金戒光明寺などにもあるが、どれも共通して、頭のかたがいわゆ

たりして数日すごしていかれた。

大島先生については、今日ごぞんじのかたも少ないと思うが、夫人は近世浄土宗の傑僧、渡辺海旭師の妹さんである。先生のご長男は東大教授であつた大島泰雄氏、その弟さんが作家の武田泰淳氏である。私がはじめて読んだ氏の本は『異形の者』だつた。

私の寺には渡辺海旭師の大きな写真額が掛けてあつたし、位牌も祀られている。私は子供のころから、スポーツ刈りに似た短髪で、背広姿の恰好いい渡辺先生の写真をみていたので、こういう近代的なお坊さんになりたいと憧れたものである。特に『壺月全集』（下巻）は座右においているが、渡辺先生はその中で「法然上人の教義と十大特色」を解説している。

一、上人の仏教は大慈悲の仏教である。二、上人の仏教は実践的であつた。三、上人の教えは万人共通の教え、平等救済の教えである。四、上人の仏教は直截簡明である。五、上人の教えは純粹である。六、上人の仏教は決定思念である。七、上人の仏教は無形式—精神的である。八、上人の仏教は没我渴仰の教えである。九、上人の仏教は人間中心の仏教である。十、上人の仏教は日常仏教、生活中心仏教である。ここでは十大特色の項目だけを挙げたが、渡辺先生は「法然上人の人格、思想、浄土教の根本思想はここから伺つてみたら、まず正鵠を逸することはあるまい」とのべておられる。

渡辺先生は「浄土教の目的は、若者に樂を与え、闇黒に光明を与えんとするものであるとのべ、特に「歴史的には寺もあるでんじやう殿堂もあり、僧俗の差別はあるけれども、それが浄土

灯台

教の精神ではない。浄土教には寺もなく、僧もなく俗もなく、共に共に仏の救いを仰ぎ、信仰の中に念仏し、自己向上、国家社会の浄化を計る中に浄土教の生命がある」と説いておられる。

○

法然上人のご遺訓『一枚起請文』には、

ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑いなく、往生するぞと、思いとりて、申す外には、別の仔細候わず。(ただ極楽に往生するためには、口に南無阿弥陀仏となえること、そうすれば必ず往生させていただけるのだと、確信をもって称えるほかには、別に何の方法もありません)

とある。往生とは死ぬことではない。極楽浄土に生まれることである。人は何のために生まれてきたのか。人生の旅は西方に向って超特急で走っている。その目的地はどこなのか。太陽は必ず西に沈む。私たちの目標は西方浄土に「往生する」ことである。阿弥陀仏は、私たちのために西方に浄土を構え、お念仏すれば臨終には仏の来迎にあずかり、浄土に往生できると呼びかけておられる。

法然上人は「このたび生死を離るる道、浄土に生まるるにすぎたるはなし。浄土に生るる行い、念仏にすぎたるはなし」と申しておられ、浄土に往生するためには、お念仏を称えるほか方法はないと説いておられる。

私はある大学の授業の中で

灯台

撮影●岡 克己

闇を照らす光

闇の夜

漆黒の荒涼たる海に
投げ出され揉まれつづける一隻がある
波の音、船体の軋み
すなわち長い航海の疲労と不安
が頂点に達するとき
遠く、微かに
一条の光が見える
驚愕
わき上がる希望
生かされていることへの歓喜
光は次第に太く強く眩い力となって
船を包み込み
確かな航路へと導く

灯台

長い歳月を越えて
聳え立つ塔

2月

鍋島灯台 (香川県)

明治生れの灯台で現在も活躍している灯台は全国に68基■その中でも海上保安庁が「Aランク」と定めた灯台が23基■鍋島灯台もその中の1つ■日本灯台の父といわれるR・H・ブラントンの設計■1872(明治5)年11月15日初点灯■瀬戸大橋の与島SAの駐車場から徒歩15分■初点灯の明治の頃は独立した小島だった鍋島も、今は防波堤で与島と結ばれている。

位置 北緯34度22分42秒 東経133度49分36秒 塗色と構造 白色・円形・御影石造り 灯質 赤緑互光 高さ 地上から頂部9.8m 水面から灯火 29m 管理事務所 第6管区海上保安本部丸亀航路標識事務所 0877-22-4063



岡克己プロフィール■1948年岡山県倉敷生まれ。風土写真家、中村昭夫氏に師事。『Aqua21』に連載された「水のある風景」が高い評価を得る。灯台はライフ・ワーク。全国120カ所、2000枚に及ぶこれらの作品はCD-ROM『日本の灯台 第一集』(発売/ジェイ・ブレジデント)として好評発売中!!



お面かぶりでの稚児行列

「三年に一度、九品佛で行われるある行事に深い関係を持つのが二十五という数字だが、一体その行事とこの二十五という数字は何を表すでしょうか？」この問題になるとお坊さんの中にも、首をかしげる人がいるかも知れない。

答えは通称お面かぶりと呼ばれる来迎会。そして二十五はお面かぶりて阿弥陀さまに従う菩薩さまの数。これが正解だが、いかがだったでしょう。全問正解は相当の「浄土宗」通ですが……。

さて、九品佛こと浄真寺の境内に足を踏み入れてみよう。

大井町線の九品仏駅の改札を出て左に曲がると、総門へ続く九品佛の参道の入り口となる。総門をくぐると右手に閻魔堂と六地藏。そして左に曲がると、仁王門が聳える。その手前右手に開山堂、奥に書院、食堂、庫裡、仁王門横には観音堂、くぐって左手に鐘楼。さらに行くとも正面に三仏堂が並ぶ。向かって左手から下品堂、上品堂、中品堂。そして上品堂の真正面、仁王門をくぐった右手に本堂がたたずんでいる。

これらのお堂や門に囲まれたスペースがとても広い。お面かぶりの時にはこの境内に二万人からの見物客が入るというから、その広

九体の阿弥陀像は十八歳で彫り始め、なんと五十一歳で完成させたという。また開山堂の珂碩上人像も自彫のものだ。

この開山に続いた二世珂憶（かおく）上人は珂碩上人が志し半ばで終えた伽藍建立の意志を継いだだけでなく、一字が六畳程の大きさもある芝枯れの名号、南無阿弥陀佛を書いたり、来迎会を始めたばかりでなく、九品佛以外にもいくつものお寺を興隆させた名のある武家の出の僧侶だ。この珂碩上人、珂憶上人という傑出した二人によって九品佛の基礎が作られ、固められたのである。

有形無形文化財や天然記念物など、とてもこの誌面だけでは紹介しきれない程のいくつもの歴史に彩られた九品佛だが、やはり代表は九体の阿弥陀さまだ。九品の阿弥陀如来像を奉祀しているお寺はここ九品佛と九軀寺（浄瑠璃寺）しかない。九品とは上品、中品、下品の三つにそれぞれ上生、中生、下生が組み合わされるものだが、この九体の阿弥陀さまの三仏堂を彼岸、つまり浄土。本尊お釈迦さまの本堂を此岸、つまり現世とし、阿弥陀さまが臨終にあたり、彼岸から二十五人の菩薩さまを従え迎えに来てくれるのが、お面かぶり、正式名称、二十五菩薩来迎会だ。この行事を行っているお寺は全国に数える程しかないが、三仏堂からの菩薩の来迎、本堂からの



御法語に聴く

闕（か）けて候わん御所作を、つぎの日申し
いれられ候わん事、さも候なん。それも
あす申しいれ候わんずればとて、御ゆだ
ん候わんはあしく候。

〔往生浄土用心・昭法全五六五〕

その日できなかつた分のお念仏を次の日にや
ろう、というようなこともありましようが、
明日やればいいだろうとはじめから気を許す
のはよくないことです。

怠ることなかれ

春は曙、といえは『枕草子』。夏はよる、秋は夕暮れと四季それぞれ趣のある情景が語られ、冬はつとめて（早朝、翌朝の意）に趣があり、雪の降る朝などは言うまでもない、と綴られている。私事で恐縮だが、長野で暮らすようになって十年目。降るにしろ、積もるにしろ、雪には、何か吸い込まれるような、確かに惹きつけられる趣がある。降りしきる雪が街灯に照らされる様など幻想的で、神秘的でさえある。が、それはあくまでも部屋から眺めている情景の話。現実の生活からすれば雪は面倒この上ない。この季節、毎朝のように待っているのは、そう、雪掻きなのだ。

信州の雪質が軽いとはいえ、一回に掻くことのできる雪の量は自ずと知れている。庫裡の玄関口から本堂の前、参道を表通りまで、裏通りに面した寺の駐車場。一人なら小一時間はかかるか。降り方によっては夜中に一度、翌朝、昼前と、こまめに雪掻きをすることもある。一通りすませて戻ってくると、もうまた何センチか積もっていた、などということも珍しくなく、雪掻きという仕事は、こ

れでいいということのない、実に地道な仕事なのだ。

寺の南側の歩道は県庁への通勤に利用する人が多い。ここも雪掻きの対象だ。ところが実にここがやっかいなのだ。というのもビルの谷間の東西の通りだからだ。雪は踏み固められるとやがて凍結する。南北の通りは日差しもあり、比較的雪が融けやすい。だが、日陰となる東西の通りは、一日中氷点下の真冬日が続くと、圧雪は何層にも重なる氷となつて歩行者の足を滑らせる。正直、危険な状態だ。こうなるとシャベルなどは何の役にも立たない。ツルハシで氷をがち割るような始末となる。まして多くの方が利用するこの路。

人に踏み固められる前にやっておかなければならないのだ。

ところで、この路についていえば、雪掻きをしなかったばかりに誰かが転んで怪我をした、というような話はないようだ。こう言う、と、それなら雪掻きしても、しなくても同じなのではないか、と考える向きもある。しかし、だからといって降り積もる雪を目の前にして、「もうやむから」「明日はやるから」といって今日は掻かない

がては「往生するときにはするし、しないときにしない」と本来の志を失ってしまう危険があらう。今まで本願の名号を称えていても、サボっている自分を許してしまったならば、かえって自分自身を卑下して居直り、「自分の往生はその時まかせ」などと阿弥陀さまを輕しめ、「神も仏もあるものか」などと八つ当たりしてみたりする。本願を疑うなんて、ちよつとした独断から始まるのかも知れない。圧雪はすぐさま凍結する。信心だつてそうなのだ。

二月十五日は釈尊のご命日。釈尊はおなくなりになるまで修行を続けていたという。覺りを得るにしても、維持するにしても、結局は不断の修行が必要だったということだ。最後の一言「怠ることなかれ」に教えのすべてが込められている。雪掻きも、お念仏も「怠ることなかれ」で貫きたいものだ。

続

午後の日差しの中で

目先のこと

吉川英明



